シリーズ 人権・じんけん（88）

識字学級

人権交流センターで、識字学級が始まって6年目を迎えました。毎週木曜日の午後になると、三々五々みなさんが集まって、笑い声の中で習字や硬筆などの学習に取り組んでいます。その成果は、秋の解放文化祭で展示され、みなさんに披露されています。

「識字」とは、もともと中国に「字をしる」「字をよむ」ことを意味する言葉としてあったようです。それが1920年頃になって、平民教育運動や社会主義運動の中で、「民衆が字をおぼえる運動」として「識字運動」という言葉が使われるようになったようです。

日本では、1960年代に部落解放運動の中で芽生えた「部落差別によって奪われた文字を奪い返す営み」として「識字運動」が取り組まれるようになりました。福岡に芽生えた運動は、やがて識字学校・識字学級などとして各地に広がっていきました。

人権交流センターでの識字学級では、自分たちの希望を生かしながら小・中学校の先生の援助をいただき、楽しい学びの中から人権文化の創造に取り組んでいます。

▲手本を見ながらの習字学習

生きるちからにする
働くちからにする
考えるちからにする
自分以外の人をおもうちからにする
勉強するちからにする
はねかえしていくちからにする
識字をやるちからにする
明日からの自分のちからにする

（参考『識字運動とは』元木健・内山一雄著　解放出版社）

発掘現場から㉕

～死者に持たせたトラベル・セット～

鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター
名和調査事務所

『鬼平犯科帳』などの作者池波正太郎はその作品の中で、「人にとって唯一明らかなことは、必ず死ぬことだ」というセリフを度々、主人公たちに言わせています。

私たちにとって死は避けられないものであり、その「人の死」を受け入れるため、生き残った人々が様々な儀式（葬式）をおこなってきました。

現在では、人が亡くなると白衣を着せ草履（ぞうり）をはかせ、お棺の中に杖を入れるなど、旅姿をさせています。これは「死んであの世へ旅立つ」という仏教の教えによるものですが、こうした習慣はいつ頃から始まったのでしょうか？

江戸時代中頃（今から3百年ほど前）のお墓を発掘調査すると、中からはいろいろなものが出てきます。一番多いのがお金。これは寛永通宝（かんえいつうほう）という真ん中に穴のあいたもの（銭形平次が投げているもの）で、あの世へ行ったときに最初に渡る「三途（さんず）の川」の渡し賃と言われています。それから刃物ですが、これにはハサミや鎌、包丁などがあります。地域などによって異なるようですが、このうちのどれかひとつを入れるようです。

さらに煙管（きせる）や毛抜を加えて頭陀袋（ずだぶくろ）に入れ、それを死者の首にかけて納棺しました。

これらは年齢性別に関わらず見られるものであることから、あの世に旅立つのに必要なもの、すなわちトラベル・セットであったと思われます。

こうしたセットは江戸時代初め以前の墓からは見られず、中頃から広まっていったようです。そして現在でも剃刀などの刃物を死者の枕元においたり、紙に印刷したお金を袋に入れて首からかけたりして、その習慣は受け継がれています。